うり

PARANOIAC

URI GAMES

This is a novelization of pixel horror game "PARANOIAC" written by Uri, and contains grotesque scenes.

――叔母が死んで三年経つ。
私はある事情から、叔母の死後放置されていた
家に移り住むこととなった――。
小説家の高村美紀は亡くなった叔母の遺した
一軒家で暮らし始める。
彼女を待ち受けていたのは、侵入を拒むような
数々の部屋と、叔母の生きていた痕跡、そして
夜な夜な彼女を襲う何かだった――。
2013年公開フリーホラーゲーム
「PARANOIAC」作者によるノベライズ。

PARANOIAC

目次

一日目 4
二日目 34
三日目 61
四日目 83
五日目 111
六日目 174
自壊（じかい） 212
鎖 235
暁闇（ぎょうあん） 248
これから 282
あとがき 290

一般に差別用語と捉えられかねない箇所がありますが、
作者の意図は決して差別を助長するものではありません。
There are parts that use discriminatory language,
but the author does not mean to condone discrimination.

本書の本文・挿絵等は転売・無断転載を禁じております。
Reproduction or resale of text and images from within this book is strictly prohibited.

叔母(おば)が死んで三年経つ。

私はある事情から、叔母の死後放置されていた家に移り住むこととなった。

一日目

ギギギと嫌な音を立てて扉が開く。途端に埃まじりの湿った空気で鼻腔が満たされ、美紀は大きなくしゃみをした。鼻を啜りながら、玄関とそれに続く薄暗い廊下を見渡す。三年前と変わらず広い家だと当たり前のことを考えながら、手に提げていたボストンバッグを三和土に置いた。

――久しぶりに来たけど、埃っぽいわね

――三年放置されてたんだし、仕方ないか

緩慢な動作で靴を脱ぐ。広い三和土にちょこんと揃えられた自身のパンプスが、美紀にはどこか寂しげに感じられた。側に据えられた靴箱を何ともなしに開けると、黴臭い匂いが鼻をつく。中には古びたハイヒールやパンプスがいくつか置いてあった。靴箱の脇にはポールハンガーがあり、黒のコートが一着だけ掛けられている。このコートや靴たちは、もういない家主を三年間じっと待っていたのだと、美紀は何だか気持ち悪く感じて、その内にでも捨ててしまおうと考えながら正面に向き直った。

――少し家の中を見てみよう

美紀はのろのろと歩き出した。一歩踏み出す毎に床が乾いた音を立て、しんとした空間に衣擦れの音が響く。都会のアパートの一室である彼女の実家は、明るいうちは壁を隔てて絶え間なく何かの音が聞こえていた。子供の泣き声や隣人の生活音、車のエンジン音など、身近で生活する人々の音で満ちていた。そんな喧騒に慣れきっていた彼女には、昼間だというのに何の音も聞こえないこの家の静けさが、少し不気味に感じられる。近隣には民家も集合住宅もあるのだが、果たしてそこに住民がいるのか、たった今ここに到着したばかりの美紀には分からず、長らく狭い空間で音を頼りに他者の存在を認識してきた彼女は、こうも静かだと他人の気配を全く感じとることができずにいた。これからはずっと、この家で暮らしていくのだ。もう仕事に必要な思考を妨げる雑音に頭を悩まされることはない。そう考えて、美紀は安心するような、どことなく寂しいような不安定な気持ちを抱いた。

玄関からは東西に廊下が伸び、正面には二階への階段と一つの扉があった。ドアノブを捻ってみたが施錠されているらしく、戸板がぎしりと軋むだけである。物置か何かだろうと捨て置き、美紀は進行路を変えた。玄関から東へ進み一つ目のドアを開けると、そこはトイレだった。ちらと中を見ただけですぐに扉を閉じる。トイレなど催せば否が応にも入らなければならないのだから、今繁々と観察する必要はない。トイレの隣には洗面所があり、洗面台と洗濯機横のガラス戸を開けると、中の浴室は意外にも綺麗なままだった。壁のタ

イルは黴も生えておらず、浴槽は触れると少しざらざらしているが、一度洗剤を含ませたスポンジで擦れば済ませられる程度の汚れでしかない。ただ、後でさっと掃除してそのままシャワーを浴びようと考えながら浴室を出た美紀の目に入った、洗濯籠に入れっ放しの衣類だけは許容しがたいものだった。白いシャツを持ち上げてみれば、薄暗い中に埃が舞うのが見てとれる。美紀はシャツを洗濯機に放り込もうとしたが、すぐにやめた。これは自分のものではないから洗う必要もないし、今後着ようとも思わない。ならば捨ててしまうのみだ。美紀はシャツを洗濯籠に戻すと、洗面所を後にした。

洗面所の向かいはリビングだった。華やかな花柄の絨毯が敷かれ、ローテーブルと二脚の赤いソファが置かれている。ふと、テレビ台横の大きな金庫が美紀の目に入った。近づいてしゃがみこみ、黒光りする鉄製の箱を眺める。一般家庭にこんな大げさな金庫など必要かと訝しく思ったが、すぐに叔母夫婦がこの大きな家をローン無しで手に入れたことを思い出す。彼らには自分のような小市民には分からない気苦労があり、そして万一のための備えが必要だったのだろう。美紀はそう思い直した。いたずらに金庫の取手を弄んでみたが、頑健な扉はビクともしない。取手の横には暗証番号を入れるためのテンキーがある。適当に数字のボタンを押すとカチカチと小気味よい音がしたが、重たげな鉄の扉は開きそうもなかった。美紀は早々に諦めると、腰を上げた。

東側の壁に設けられたドアは、ダイニングキッチンへ繋がっている。白いクロスのかかったテーブルセットがあり、壁際の棚には固定電話が据えられていた。微かに膜の張ったテーブルの上を指でなぞると、指の腹に埃が粘りついた。ふっと息で吹きながら、荷物の整理より家中の掃除を優先すべきかも知れないと美紀は考える。ほんの数日放っておいただけで家具には埃がへばりつき、床には髪の毛が散らばり、水場には水垢がこびりつくものなのだ。三年無人だったこの家に一体どれほどの汚れが堆積しているのか、考えただけで怖気立つ。空鍋が置きっ放しのコンロや白く汚れたシンクを嫌な心地で眺めながら何ともなしに冷蔵庫を開けた美紀は、すぐさま自分の軽薄な行動を後悔した。なんと食材がそのまま中に残っていたのだ。冷気と共に臭気が鼻を刺し、慌てて冷蔵庫の扉を閉める。目に涙を浮かべて咳き込みながら、こういったものの処分は母が済ませたと思っていたのにと、この場にいない自分の母を恨んだ。母がこの家を三年の間、まさしく放置していたのだということを身をもって痛感する。叔母の唯一の身内であったはずの母は、思えば盆に叔母の墓に参ったことも、部屋の隅に置かれた小さな仏壇に手を合わせたこともなかった――美紀が見たことがないだけかも知れないが。長く共に過ごした経験からそういう人だと分かってはいたし、別段諌めようという気も起こしたことはないが、この機になると流石にその顧慮のなさに辟易しかねない。自分がこの冷蔵庫を掃除しなければならないのかと

鬱屈した気分に落ち込みながら、美紀は勝手口に目をやった。ドアには小窓があり、そこから濃緑色が窺える。近づいて覗いてみれば、夜闇の中風に揺らぐ木々の葉が陰影深く彼女の目に映った。地面には雑草が鬱蒼と生い茂り、小さな黄色い花が咲いているのが暗闇でも見てとれる。美紀はそんな緑溢れる光景を、鬱陶しい思いで眺めていた。彼女は植物の青臭い匂いが嫌いだった。成長過程にある学生らとどこか同じ匂いがする。殊更に生命を感じさせる植物だとか動物だとか、そういったものを美紀はいつからか苦手としていた。何が原因なのか、いつからそうなのか、彼女自身にも分からない。

キッチンから繋がる木戸を開けて和室に入ると、季節外れのこたつが出しっ放しになっていた。実家にはこたつなどなかったため、物珍しさから中に足を入れたり布団を捲ったりとしばらく遊んでみたが、すぐに恥ずかしい気分に見舞われて立ち上がる。押入れの中に布団や行李を確認した美紀は、思わず襖を乱暴に閉めていた。あの中にはかつての住人の私物がいくつ詰まっていることだろうと考えて、詮索するのが億劫になったのだ。冷蔵庫すら手つかずだった母が、押入れの中など整理している訳がない。どうせ片づけるのは自分だが、何も今日でなくともいいだろう。美紀はそう思うことにし、和室を出た。

玄関まで戻り、今度は西側の廊下へ進む。北側のドアを開けると、赤い毛氈に黒い皮張りの高級そうなソファ、ガラス張りの重厚なローテーブルが目に飛び込んできた。ここは応

接室かとしばらく室内を眺めた後、扉を閉める。次に南側の二つのドアを開けようとしたが、どちらもガチャとノブが詰まり、戸板が僅かに揺れるだけだった。必要もない故人の部屋に何故鍵がかかっているのかと苛立ちを覚えながら、美紀は踵を返した。

二階に上がると、一階と同じように東西に廊下が広がっている。階段を上がってすぐ右の扉を開けると、そこはベッドや机、クローゼットなどが一通り揃った個室だった。小花模様の絨毯が敷かれ、小さなローテーブルと一人用のソファまで設えてある。机の引き出しやクローゼットを確認してみたが、中には何も収納されていない。無個性で整然とした室内を見回しながら、ここは客人を泊めるための部屋だったのだろうと美紀は考えた。彼女は客なんて滅多に訪れず、訪れたとしても泊めることなどない狭苦しい実家でずっと生活していたため、親近感を覚えることはなかった。しかし、手頃な広さである程度の用を済ませられる部屋は、こんな広い家に一人住んで空間を持て余したりしないだろうかと不安に感じていた美紀にとって、貴重に感じられるものだった。ふっと力が緩んで鞄の持ち手が彼女の掌からするりと抜け、鈍い音とともにボストンバッグが床に落ちた。このまま鞄は置いておこう、しばらくはこの部屋で過ごし、徐々に他の部屋も使っていけばいいと考えながら、美紀は部屋を後にした。

そのまま二階西側の残りのドアをあたってみたが、客室前のトイレ以外、全て施錠され

ていて中に入ることは叶わなかった。冷たいドアノブを捻り、ガタンと空虚な音がする度に、美紀は自分がこの家に迎え入れられていないような気分に落ち込んでいく。家人が既にいない家が拒絶をするというのもおかしい話だが、とにかく彼女にはこの家がやけに有機的で、そして自分と相容れない存在であるかのように感じられた。こぢんまりとして必要最低限の家具と雑貨しかない実家は、今思い返せば矮小な自分という存在にぴったりな空間だったのかも知れない。反対に大きくていくつもの部屋に分かれたこの家は、自分を際限なく立ち回らせ、施錠という絶対的な姿勢で以て幾度も拒否してくるのだ。美紀はぼんやりとそんなことを考えた。ただ部屋を見て回っているだけなのに、彼女はひどく草臥れて、見知らぬ人々に挨拶するために駆けずり回っているような気分になっていた。

東側に行くと、三つドアがある。南の壁に設けられた二つは、施錠されており開かない。美紀は小さくため息をついて、北側のドアに向き直った。

彼女はこのドアの先に何があるのかを知っていた。そこは書斎である。確か、壁に沿って天井に届くほど高い本棚が並び、ハードカバーや文庫本、ハウツー本から雑誌まで様々な書籍が並んでいた。テーブルとソファがあり、その横にはフロアライトが立っていたはずである。彼女はその部屋の様相を繁々観察したことはない。しかしこうして部屋の前に立ったことで、まるでアルバムのページを繰って写真を見るかのように、脳裏に映像が次々

と浮かんできたのだ。フラッシュバックに近いものかも知れない。無意識のうちに、美紀はドアノブを回していた。しかし扉は開かず、今までの施錠された扉のノブとは違う感触に彼女は違和感を覚えた。ノブを回しきっても鍵がかかっている時のようなつっかかりがないのだ。ひょっとしたらこの部屋は施錠されているのではなく、ただ開かないだけなのかも知れない。例えば、ドアを押さえつけるようにして家具が倒れているとか――ドアの近くにそんな重たい家具はなかったような気もするが――、そんな理由で開かなくなってしまっているのかも知れない。理由がどうであれ中に入れないことには変わりなく、美紀は肩透かしを食らった気分で階段をとぼとぼと下っていった。

一階に戻ったところで、突如静寂を電子音が破った。びくりと顔を上げた美紀はそれが何の音なのか分からず困惑し、きょろきょろと辺りを見回す。直に電話が鳴っているのだということに思い至り、慌ててダイニングルームへ駆け込んだ。

薄暗闇の中、固定電話の液晶画面が緑色に光り、『非通知』の文字が映し出されている。自分がついさっき立ち入るまで無人だったこの家に、一体誰が何の用事でかけてきたのだろうと訝しく思いながら、美紀は受話器を耳に当てた。

「……高村です。どちら様ですか」

「あら美紀、もうそっち着いてたのね。どう？　新居は」

聞き慣れた声に、美紀はほっと胸を撫で下ろした。埃っぽいけど広くていいわと当たり障りのない返答をする彼女の顔には、自然と笑みが浮かんでいる。相手が母だったからではなく、常日頃聞いて慣れ親しんだ声音を耳にしたからという単純な理由で、彼女は安堵を覚えていた。

「そりゃよかった。ああ、アンタの荷物送ったから、明日には着くわよ」

母が言っているのは、自分が実家を出る前に服や本、ノートパソコンなどを詰めこんだダンボールのことだろうと美紀は思い至る。そういえば、梱包まではしたものの宅配所に持ち込むのを忘れていた――それを母が手配してくれたということだろう。母の配慮に彼女は素直に感謝を感じていた。このまま気づかないでいたら、自分は数日の間同じ服を着て過ごす羽目になっていた、と。

「ありがとう。……ところでちょっといい？」

美紀はこの家で一番気掛かりなことを、先住者に自分よりいくらか詳しいであろう母に聞いてみることにした。

「この家、至る所に鍵がかけてあるんだけど、どこに仕舞ってあるか分からないの。お母さん、知らない？　そっちには、ないよね……」

母は叔母の死後に一度、遺品整理のためにこの家に来ているのだ。ひょっとしたらあらゆる場所に施錠したのは母かも知れない、ならば鍵は実家にあるだろうと、美紀は一縷の望みをかけていた。僅かな沈黙の後に、ああ、鍵ね、と母が低く答える。

「こっちにある訳ないじゃない。あの子、ひどい被害妄想だったからね。家中に鍵かけて、しかも隠してたのよ。本当、馬鹿みたい。とにかく、そっちで何とかしてちょうだい。どうしてもなけりゃ、鍵屋でも呼びなさいよ」

矢継ぎ早に続けた後、それじゃと母は告げる。いつもそうだ、この人は自分のペースで会話を進め、自分のタイミングで話を切り上げてしまう——そう思いながら、美紀がじゃあねと呟いたのとほぼ同時に通話が切れた。頭の中に響くツーツーという不通音をしばらく聞いた後、彼女は受話器をそっと置く。その仕草からはどこか名残惜しさが滲み出ていた。受話器の表面が薄い埃の膜で覆われていたためか、指先がべたついている。母と会話を続けたかった訳ではないが、なまじ中途半端に人の声を聞いてしまった分、彼女にはこの家の静けさがより寂しく感じられていた。

——もう、大分遅いのか

ふと顔を上げて壁掛け時計を見ると、長針と短針は九時過ぎを示している。僅かに震えつつ進む秒針を眺めながら、いつの間にこんな時間になったのかと彼女は自分の足取りを

思い返した。確か東京から電車で最寄り駅に辿り着いたのが七時半くらいで、そこからタクシーでここまで来るのに十五分ほどかかったはずだ。となると彼女は、一時間以上家の中をふらふらと彷徨っていたことになる。長時間探索した結果彼女が得たのは、垣間見える故人の生活の痕跡と、何とも言えぬ不快感だけだった。美紀はふうとため息をつき、鬱陶しく伸びた前髪をかきあげた。

――シャワー浴びて寝よう

大して運動もしていないのに、美紀は全身に疲労が満ちているのを感じた。微熱がある時のように手足が重く、歩いてドアを開ける動作すら億劫である。その疲労感が三時間電車に揺られたためのものか、はたまた慣れない場所を歩き回ったためのものか、彼女自身にも分からなかった。いつもなら九時なんて早い時間に就寝することはないのだが、今はとにかく寝転がって眠ってしまいたい。和室の布団よりは、バッグを置いてきた客室のベッドの方が寝やすいだろう、埃がたまっているかも知れないが、シーツに潜り込む前に軽く叩けば少しはマシになるはずだ――そう考えながら、美紀は風呂場へと向かった。

熱い湯が滝のように肩や背を打つ。髪の毛の隙間をぬって湯が顔まで流れてきて、美紀は項垂れたまま目を瞑った。シャワーの音と水がタイルの床に弾ける音が浴室に満ち、頭

の中で轟音が鳴り響いているような心地から、彼女はじっと身を固くしていた。

湯がやけに熱く感じられるのは、きっと自分の体が無自覚のうちに冷えていたためだろうと、美紀はぼんやり考える。今は秋口で昼間はさほど寒くないが、夜になると途端に肌寒くなる。この家に足を踏み入れてから孤独感をひしひしと覚えるのは、広い空間や無音だけでなく寒さのせいもあると美紀は考えた。普段人付き合いなど滅多にしない彼女でも、寒い季節になると無性に人恋しくなることを、二十五年の人生で学んでいた――それに対する策などは一切持ち合わせていなかったが。

何となく床のタイルを見つめていた美紀は、排水口の蓋に髪の毛が何束も絡みついていることに気づき眉根を寄せた。ついさっきシャワーを浴び始めた自分の髪の毛がこんなに抜ける訳はない。となれば――そう考えて、ぶるりと身震いする。既にこの世にいない人物の体の一部が、朽ち果てもせず未だ残っているということが空恐ろしく、気味が悪く、そして不快だった。物置を見つけたらまずはビニール手袋を探そう。そして家中の遺物を取り去ってしまうのだ。そうすれば、この物恐ろしさや不快感は消えるはずだ――

――私はこれから、どうなるんだろう

そんな考えがふと頭によぎり、美紀ははっとした。一体何故そんな馬鹿げたことを考えてしまったのか、彼女自身にも分からない。何が不安なのか、今は休んでいるとは言え自分

には職がある、住む家がある、母という家族がいる――困窮しているとは言い難い境遇にあるのに。今までにもそんな不安を覚えたことはあるが、どこか漠然としていて、夏の湿気を含んだ空気のように体表を覆うのみだった。それが何故今更、蜂がちくりと肌を刺すように自分を襲ってきたのか、彼女には分からない。今にこの虫刺症から毒が広がり、体内をかけ巡り、訳の分からない恐怖と苦しみに悶えながら死んでしまうのではないか、そしてあの人と同じようにこの世に僅かな痕跡を恨みがましく残し、消えてしまうのではないか――そう想像して、美紀は項が粟立つのを感じた。衝動的に蛇口を捻りシャワーを止める。ノズルの先から湯が垂れ、水音がポタポタと浴室に反響した。

洗面台の中からタオルを取り出し、顔を埋める。濡れた衣服を湿気の多い場所で放置していたかのような臭いが鼻をつくが、美紀はもうそういった嫌な臭いを拒む気力もなかった。今の彼女はただ、一刻も早く濡れた体を拭い、どこか少しでも柔らかい所に身を伏せ眠ってしまいたかった。火照った体が冷気に粟立っている。吸水性が異常に悪いタオルはなかなか彼女の体から水気を除くことができない。髪の毛をがしがしと乱暴に拭いて、美紀はタオルを洗濯機に投げ込んだ。寝巻きなど持ち合わせていない彼女は、今まで着ていた服を再び身に纏うと脱衣所を後にした。

重い体を引きずって階段を上がり、客室に入ろうとした瞬間、ガタンと大きな音が響い

た。細い体を震わせて踵を返した美紀は、一気に速くなった心臓の鼓動を押しとどめるように胸を強く押さえた。

——何の音？

音がしたのは階下のようである。美紀は恐る恐る、階段を下っていった。

見れば、玄関にあるポールハンガーが倒れ、コートが床に投げ出されている。鼠でもいるのかとおっかなびっくり近づいたが、おかしなものは何も見当たらない。きっと服の重みで倒れたのだろうと考え——三年間不動だったものが、今になって急に倒れるのもおかしな話だが——、美紀は倒れたハンガーを起こした。しゃがんで床のコートに手を伸ばしたところで、彼女はコートのポケットの暗がりで何かが光っていることに気づいた。ポケットに手を差し入れると、指先に冷たく硬いものが触れる。金属独特の冷たさを何だろうと思いつつ手を引き抜けば、ちゃらりと音を立てて小さな鍵が姿を現した。裏返したり顔を近づけてみたりしながら、繁々と観察してみる。大きさからして、玄関ドアの合鍵ではなさそうだ。どこかの部屋の鍵だろうと当たりはつくが、どこが開くものなのかは皆目見当がつかない。

——探すのも面倒くさいし、今日は寝よう……

美紀はスカートのポケットに鍵を入れると、のろのろと階段を上って行った。

客室のベッドの傍らに立った美紀は、紅梅色のベッドカバーやくすんだ桃色の枕をじっと見つめる。客用らしく使い込まれた印象は受けないが、それでも過去に他人が使ったかも知れない布団で寝るのは気分が悪かった――同様の理由で、彼女は宿泊施設に泊まることも嫌いである。しかし我儘など言っていられない、和室の布団の方がもっと嫌だと自身に言い聞かせながら、美紀は掛け布団をばっさと捲り上げた。宙に舞った埃を見ないようさっさとベッドの中に潜りこんだ彼女は、くしゅんとくしゃみを一つした後、瞼を閉じた。

時計がコチコチ鳴る音と心臓の鼓動の音。一定のリズムを刻む二つの音が絡み合い、たどたどしい旋律が頭の中で反響する。冷たい掛け布団とシーツに挟まれた体から次第に力が抜けていき、疲労で強張っていた肩の筋肉が弛緩する。美紀は鼻から深く息を吐き、さらに肢体を脱力させた。

古い羽毛布団の重みにゆっくり追いやられるように、美紀の意識は体外の暗闇へと溶け出ていった。

ぎしぎしと、何かが軋んでいる。

ぽたぽたと、何かが垂れている。

ゆらゆらと、影が揺らめいて――

――あれは本棚だろうか。

輪郭の不明瞭な黒い靄が、板で等間隔に仕切られた何かに映し出され、振り子のようにゆっくり揺れるたび、並ぶ書籍の背表紙がちらちらと翳る。そして――

――ガタンと大きな音を立てて、何かが落下した。

「――はあっ……!!」

目を開けると同時に、美紀は勢いよく息を吸いこんだ。

真っ暗な天井を見つめて硬直していた彼女は、早鐘を打つ心臓の音を知覚してようやく、荒い吐息を零し始めた。後頭部から首の後ろにかけてが、熱を持ってじっとりと汗ばんでいる。いつの間にか彼女はぎゅっと拳を強く握り、爪先を丸めていた。

――夢……？

――何だったか……よく覚えてない……

既に美紀は、眠る自分を目覚めさせるほど慄かせた夢の内容を忘れてしまっていた。どうにか思い出そうと記憶を手繰るものの、夢は意識の外側へ散らばってしまった後で、欠片すら残っていないようである。いくらか静まった心臓の音に耳を傾けながら、美紀はごくりと唾を飲みこんだ。乾いた喉の粘つきから、美紀は少し前から服用し始めた薬を今日はまだ飲んでいないことに思い至る。たかが夢でひどく動揺し、体が緊張しているのはそのせいに違いない。美紀はゆっくり身を起こすと、ぐしゃぐしゃに絡んだ後ろ髪を撫でつけながらベッドを出る。クローゼットの前に置いていたボストンバッグを漁りピルケースを取り出すと、彼女は客室を出て暗い階段を下りていった。

シンクの水栓のハンドルを押す。ごぽっと一瞬詰まった音がした後、水が勢いよく流れ

始めた。コップはないかと背後の食器棚を顧みた美紀だったが、すぐ前に向き直る。使う前に洗剤で洗わなければならないのが面倒だったのだ。右の掌で流水を掬い、一口含んで喉を湿らせる。ピルケースから取り出した錠剤二つを舌にのせると、両手で形作った盆に水を溜めて口の中に流し込んだ。液体が僅かな抵抗を以て喉の奥へと流れていき、やがて鳩尾辺りでひんやりした感覚が消える。知らぬ間に目を瞑っていた美紀は、ゆっくり瞼を上げた――そして、大きく目を見開いた。

黒く細い髪の毛が、両手の指に幾重にも絡みついていた。

「――うわっ!!」

思わず叫んで後退る。パニックに陥った美紀が滅多矢鱈に手を振り回すと、濡れた髪はびちゃりと床に落ちた。

しばらく呆然と床の黒い物体を見つめていた美紀は、ふとあることに気づき、慌てて咳き込み始めた。嚥下した錠剤を吐き出す勢いだったが、口からは呼気しか出てこない。水と一緒に髪の毛まで飲んでしまったというのは勘違いだったらしい。荒い呼吸に肩を上下させながら俄かに安堵した美紀だったが、シンクに視線を向けて再びぎくりとした。排水口の蓋に絡みついた髪の毛が、流れ落ちる水の動きに合わせて揺らめいている。水中の海草のような――まるで意思を持たない生き物のようなその動きに、美紀の首筋が粟立った。

――何で水道からこんなものが？

水道から赤茶けた水や白っぽい水が出てくるという話はよく聞くし、それらが給水管の錆や水に混ざった気泡が原因だということも知っていた。しかし水道から髪の毛が流れ出るなどという話を、美紀は未だかつて聞いたことがない。水道の構造や原理など詳しく知らないが、水道整備の行き届いた現代にそんな事態が起こり得るのかと訝しく、また単純に気持ちが悪くて仕方がなかった。

シンクに歩み寄り恐る恐る水栓のハンドルを押すと、水の流れは止まった。水は排水口

へごぼごぼ飲み込まれていき、水流に揺蕩っていた髪の毛の動きも次第に落ち着いた。しんと静まり返った暗闇で、美紀はほうと息を吐く。体は幾分か弛緩したが、胸の内に凝った嫌悪感は消えずに残っていた。

――明日、水道点検でも頼まなきゃ。今日はもう、寝よう……

どんなに気分が悪くとも、自分に今出来ることは何もない。ならばさっさと眠って、出来るだけ早く朝の目覚めを迎えるべきだ。そして業者に全ての始末を任せてしまおう――美紀は床と排水口の黒い塊を視界に入れないよう注意しながら、台所を後にした。

客室に戻った美紀は、布団が捲られたままのベッドに手を伸ばした。

指先が布地に触れるより早く、ギイイ、と板を擦り合わせるような耳障りな音が彼女の鼓膜を震わせる。美紀は咄嗟に手を引っ込め、ドアの方を見た。

――何？　今の音……

目だけを動かして室内を観察したが、何も変わった所はない。それもそうだろう、物音は壁に遮蔽された向こう側から聞こえてきたのだ。一瞬驚きはしたものの、たちまち美紀の頭を苛立ちが襲う――ハンガーといい水道といい、何故休もうとする自分を脅かすことばかり起きるのか、と。乱暴に布団を引っ掴んで中に潜り込もうとした美紀だったが、何とか

思い止まり、部屋の出口へ向かってつかつかと歩き出した。聞こえた音は、ただの家鳴りだと看過するにはやけに大きかった。台所の水道と同じく家のどこかで発生した異状の兆しか、もしくは異状そのものかも知れない。対応は明日するにしても、今確認しておいて損はないだろうと考え直したのだ。

客室を出た美紀の足取りは階段の逆方向へ向かっていた。何となく音が鳴ったのは階下ではない気がしたのである。暗闇の中、トイレ前の開けた空間をうろついていた美紀は、ふと東側の廊下の異変に気づき足を止めた。三つある扉の内、北側の一つ——施錠されていないのに開かなかったドア——が開いている。物音の正体は扉が開いた音だったようだ。訝しさからそろそろと近づき、ドアの正面に立った美紀は光沢のある化粧板を上から下まで眺め回したが、ドア自体におかしな点は見当たらない。僅かに開いたドアの隙間を覗いてみても、如何せん暗くて中の様子は全く分からなかった。かろうじて床に敷かれた草色の絨毯が見えるくらいである。外から確認することは諦め、美紀はギギギと不快な音を立てる扉を押し、室内にゆっくり足を踏み入れた。

美紀の記憶に違いなく、そこは書斎だった。天井まで届く高い本棚が壁際に並び、様々な書籍の背表紙がダークブラウンの棚の中で賑やかに映えている。室内中央から左寄りの位置にローテーブルと一人用の赤いソファがある。ソファはリビングや客室にあるのと同じ

ベルベット地で、廊下からうっすら差し込む光を滑らかに反射していた。記憶ではテーブル横にあったはずのフロアライトが部屋の隅に移されていたが、美紀にとっては些末なことである――今の彼女は、床のある一点から目が離せなくなっていたのだ。

――このしみ……何……？

絨毯の中央辺りが直径二十センチほどの大きさで丸く黒ずみ、草色を一層濃くしている。

――もしかして……

ふと、美紀の脳裏に何かがじわりと滲む。すぐに彼女は目をぎゅっと瞑り、その何かがはっきりした像を形作るのを、頭を軽く振って止めた。黒く翳りそうになる胸に拳を強く押しつける。指の骨に伝わる心音の鼓動が、少しずつ美紀の気分を静めていった。

――ラグ、替えなきゃな。今度、買ってこよう……

先のことを考えると気持ちが少し落ち着いたような気がして、美紀はふうと息を吐く。澱んだ室内の空気から逃れるように、さっと踵を返して書斎を出ると後ろ手に扉を閉めた。

ノブを回しても開かなかったドアが何故独りでに開いたのか、そもそも家具で塞がっていた訳でもない扉が何故開かなかったのかなど、不可解なことはある。しかし今の美紀には倦怠感や眠気を押してまで物事に当たる気力がなかったし、さらに言えばあの部屋にはもう入りたくなかった。読書好きな彼女にとって壁一面に本が並ぶあの書斎は垂涎ものだ

が、遺品だと知っていると手を出すのが躊躇われる。何よりあのしみが網膜に焼きついて――いずれ絨毯を替えなければとは考えたものの、いっそ書斎を開かずの間にして放置してしまいたい気分になっていた。

ぼうっと廊下を歩いていた美紀の背後で、ギギギ、と音が鳴った。

「……何……？」

弾かれたように振り返り、たった今閉めたはずの書斎の扉が開いているのを見た美紀は、思わず疑問詞を零した。硬直し立ち竦んだまま、じっと開いたドアを注視する。

背景を曖昧に暈す暗闇から染み出るかのように。

じわりと、戸板の陰に黒い人影が浮き上がった。

「……何、あれ……!?」

眼前の光景に慄いた美紀は、ゆっくり一歩ずつ後退った。錯覚かと目をごしごし擦ったが黒い影は――頭と両腕を垂らしたような姿勢の人影は、依然そこに立ち尽くしている。トンと彼女の背が何かに当たる。知らぬ間に客室外の壁まで下がっていたらしい。そこでふと美紀は、頭の中で声が――吐息混じりに低く、長く呻くような女の声――が響いていることに気づいた。女声の奥にはプツプツとノイズのような音まで聞こえ、彼女の鼓膜を痛めつけている。背筋がぞおっと震え上がり、慌てて両耳を塞いだものの、声は消えない。それどころか脳内で余計に大きく鳴り響き始めた気さえして、美紀はすぐに手を耳から離した。そして、ぎくりと身を固くした。

書斎のドアの陰から上半身のみを覗かせていたはずの人影が、いつの間にか全貌を顕にしている。驚いてパチと瞼をしばたいた次の瞬間には、影はぐるりと向きを変えて美紀に正面から相対していた。驚愕のあまりガタッと背後の壁に両手で貼りついた彼女が、見開いた目を再びパチとしばたくと、今度は人影がその大きさを僅かに増した――まるで四肢を動かすことなく、音を立てることなく、一瞬で近づいたかのように。

――こっちに来てる……!?

そのことに気づいた途端、美紀は背中を毛虫がよじ登ったような感覚に襲われ、全身が

総毛立ったのを感じた。

――嫌だっ……!!　気持ち悪いっ……!!

――そ、外に逃げよう!!

強張る体を壁から引き剥がすと、美紀はもつれる足を必死に動かして階段を駆け下りた。玄関に辿り着き三和土に裸足で飛び込んだ彼女は、押し開けようとしたドアに勢いよく体をぶつけてしまった。ノブを下げたにも関わらず扉が開いていないのだ。がちゃがちゃと繰り返しノブを下げ渾身の力を込めて押しても、まるではめ殺しにでもなってしまったかのように玄関ドアはびくともしない。

「何で!?　何で開かないの!?」

半狂乱になって戸板をばんばん叩き喚く。突如、ザザザと耳を劈くようなノイズが美紀の鼓膜を揺らし、視界がテレビの砂嵐のような影で覆われた。きゃあと悲鳴を上げて後ろへ飛び退き、廊下に尻餅をつく。衝撃から目をぎゅっと瞑ってしまった美紀は、耳に流れ込む低い呻き声にはっと瞼を開けた。ドアの前にあの黒い人影が佇んでいる。美紀はひゅっと息を呑んで立ち上がり、数歩後退った。

――に、逃げなきゃ……!!　どこかに隠れよう!!

心の中で叫んだ途端、人影は項垂れた姿勢のままゆっくりと美紀に接近し始めた。東の

廊下へ駆けた美紀は、影が曲がり角を超えて姿を現さないうちにトイレに駆け込んだ。

真っ暗な密室に立てこもり、どんな小さな音も鳴らないよう息を潜め、胸を手で押さえる。呼吸音はまだしも、いくら激しく高鳴っているとは言え心臓の音が外に漏れ出ることはないだろう。しかし、今の美紀は恐怖に全身を支配され、まともな思考が働いていない。彼女はただ胸をぎゅうと強く押さえ、目を見開いて暗闇を凝視することしかできずにいた。

再び美紀の視界が白黒でざらつき、ザザザと耳障りなノイズが響いた。

悲鳴を上げ堪らず個室から飛び出した美紀は、真横に人影が立ち尽くしているのに気づき慌ててリビングへ逃げ込んだ。周囲を慌ただしく見回すが、広い空間には身を隠せるような遮蔽物が何もない。ふと赤いカーテンの引かれた窓が目に入り、彼女は夢中でそれに飛びついた。カーテンを払って内鍵を下ろしサッシを力一杯引いたが、ガラスがガタガタと揺れるだけで窓は開かない。視界の隅で黒い影が揺れたのを捉えた美紀は、今度は台所へ駆け込む。脱出が諦めきれず勝手口に走り寄ったが、ノブを下げても戸板を押しても簡素な木のドアは開かない。殆ど泣きそうになりながら、美紀はそのまま和室へ転がり込んだ。

密室の中央にでんと据えられたこたつが美紀の目に入る。奥には庭に面する縁側とガラス障子があるのだが、恐怖と焦りに翻弄された彼女は無我夢中でこたつの中へ潜り込んだ。どうせ開かないことは分かり切っていたのだ。

赤子のように体を丸め、ぶるぶる震える体を両腕で抱きしめる。目を開けているとまた視界に何かが入ってきそうで、彼女は瞼をもぎゅっと強く瞑った。あちこち走ったせいで息が切れ、どうしても荒い吐息が出てしまう。その音は分厚い布団で覆われた空間にとてもよく響いた。思い切って空気を大きく吸い込み、唾で乾いた喉を潤すと、一寸の呼気も漏れ出ないよう唇をきつく結んだ。

――お願い、来ないで!!

密閉された暗闇で喧しい心臓の音だけを聞きながら、美紀はひたすら縮こまっていた。